

史遊会通信

No.237 号
平成 26 年
12 月 10 日

編 集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新 井 宏

今年一年の読書特集

漆原直子

①『大麻と古代日本の神々』

山口博 著

古代の氏族の一つに、朝廷祭祀を司っていた「忌部氏(斎部氏)」がいるが、同じ朝廷祭祀を司る中臣氏により祭祀権を奪われ、権威を失墜した。斎部広成がそれゆえその憤懣を大同二年(八〇七年)に『古語拾遺』を撰上している。忌部氏の本貫地は、大和国高市郡金橋村忌部(現奈良県橿原市忌部町)とされているが、出雲、紀伊、讃岐、阿波、安房、常陸等にも分布している。

この本の著者は、忌部氏は祭祀にあたり、「麻」で和幣を作るための麻を栽培し、さらに麻の種子を焼いてその煙を吸うことによる

幻覚作用を引き起こしていたのではないかと指摘している。いわゆる大麻の吸引によってトランス状態となって神と交信するのである。このような風習は、ユーラシア大陸のスキタイのシャーマン等の風習にあるという。ヘロドトスも『歴史』の中で、スキタイが大麻の吸引をしている様子を記録している。またそのシャーマンは白い布を何枚も身に着けて羽のようにして、鳥の姿になるという。著者は忌部氏が麻で和幣を作っていたのもそのためではないかとしている。中国の新疆ウイグル自治区の楼蘭にある洋海遺跡(紀元前千年から紀元前後)からは、シャーマンと思われる大麻草を持った白色人種のミイラが発見され、また、甘粛省の東郷林家遺跡からは陶製の容器の中から炭化大麻種子が発見されている。

例会のお知らせ

◎ 十二月忘年会

日時 平成二十六年十二月十日(水)
午後六時～八時
会場 学士会館
会費 三千円

◎ 一月総会

日時 平成二十七年一月二十八日(水)
午後六時十分～八時
会場 千代田区立日比谷図書文化館
四階セミナールーム
講演 新井 宏氏
テーマ 出雲風土記と古韓尺

◎

一月号自由執筆 瀧澤中、鍋屋次郎、
高橋正彦の諸氏 締切十二月末で

日本列島においては、奈良県纏向遺跡、北海道札幌市のキウス遺跡、青森県是川遺跡等から炭化大麻種子が数多く出土している。ちなみに、邪馬台国の卑弥呼が鬼道を用いて人を惑わすと魏志倭人伝に記されているが、大麻を用いていたのではないかと筆者は考えている。

これまで、大麻使用の視点から古代史をとらえたことはあまりなく、中国ではタブー視されていたそうであるが、日本列島の歴史と文化の成り立ちを考えるにあたつては、ユーラシア大陸の文化、特に遊牧騎馬民族文化を知ることが極めて重要ではないかと、本書を読んで改めて思った。

② 『民族の創出 まつろわぬ人々、隠された多様性』

岡本雅享 著

「民族」という言葉から何を想像するだろうか？民族音楽、民族衣装などの文化的な明るいイメージもあるが、その一方では、民族主義、民族紛争、民族浄化、エスノサイド、ジェノサイド等々、歴史的な面ではダークなイメージを受ける。では、「民族とは何か？」と問われたら何と答えるか、さらに、「あなた

は何民族か？」と問われたら何と答えるか……。私が思うには、「民族」とは同じ言語、文化風習を持った人々のことである。また自分が何民族かというのは、私の場合日本列島の本州で生まれ育っているの、北海道のアイヌの人達から見れば、「シヤモ」、沖縄の人達から見れば「ヤマトンチュ」であるが、自らはそのような言わない。そのような質問は避けて通りたいと思ってしまう。

この著者は、大学で教えている学生にそこを敢えて問い、答えられる学生がいなかったという事実から、今日の日本における様々な矛盾、社会問題、復古調路線の教育問題等、様々な文献や統計資料を提示しながら、日本の民族意識の問題性を浮き彫りにしている。

著者は「出雲」出身で、自らを「出雲族」であるとして、特に日本のマジョリテイが持つ「日本単一民族・単一言語」意識」という一元的な見方に対して、声を大にして異議を唱えている。単一民族・単一言語意識が形成されたのは、明治以降、特に戦後の高度経済成長期からであり、「規格大量生産型社会」を強化補完する概念だとする。それ以前の江戸時代は、諸国の大名間では言葉が通じないため、話しをする時は謠本の「候言葉」を使

っていたという。また、武士や知識人の共通語は漢語であったという。「国語」や「標準語」ができたのは明治三五年頃で、「東京の山手中流家庭の言葉」を基に、「標準語」として「国語」にしたという。私は標準語も「東京弁」という方言の一つではないかと思っていたが……。

「民族」という言葉自体もその語源をたどると、明治政府が作り出した和製漢字語であり、明治中半頃に中国へ伝播していったという。アイヌや沖縄の人たち以外の、いわゆる、「日本民族」と括られる人たちの中にも、民族的な多様性があると、著者は指摘する。出雲、蝦夷、熊襲・隼人とされた人たちの民族としての復権、また、多元的な社会観を培うことこそが、国際社会の中に位置づけ、今日の閉塞的な日本社会を活性化させるとする。そしてこのような過程を「ネイションビルディングの脱構築」と言うそうである。私は初めて知る言葉であるが、この「脱構築」に是非期待したいと思う。

③ 『常陸国風土記と神仙思想』

志田諄一 著

(紙面の都合で14ページに続く)

柴田弘武

「岡本雅享(まさたか)著『民族の創出—

まつろわぬ人々、隠された多様性』

(岩波書店)

本書表紙の帯には「出雲、エミシ、クマソからみた日本のネイションビルディング—同質社会幻想からの脱却と多元国家観の構築をめざして」とある。

「あなたは何民族ですか？」と問われて、すぐ答えられる人はあまりいないのではないか。私もその一人である。そしてやや間をおいて「大和民族？ いや日本民族？」などと戸惑う。

本書によれば「大和民族」という言葉の初出は明治二十一年(一八八八)発行の国粹保存主義の雑誌『日本人』2号における、志賀重昂の論文だという。しかも「大和」という語の初出も天平宝字元年(七五七)で、「記紀」には(「倭」「大倭」はあるが)一カ所も使われてない、と指摘している。言われてみればそうだったのかと我が身を恥じ入るばかりである。

本書は四〇〇余ページの大部なものであり、ここではその一部を取り上げるだけである。

まず日本は単一民族だといわれるが、古代以来、多様な民族が混合していた。その一つの例として、明治半ば頃までは言語不通の列島だったことを挙げる。著者は出雲出身で出雲弁を話せるが、東京人には殆ど通じないという。私自身も二〇年ほど前に青森県に行つて、田舎道で古老に道を尋ねたところ、その言葉は全く理解出来なかった経験がある。

近年では日本中どこへ行つても若い人なら「標準語」が通じるが、これは学校教育とラジオ・テレビの普及によるものであるという。その「標準語」なるものも明治の近代国家が東京の一部の言葉を取り上げて作った人工語だと指摘する。そして「民族的なものは風土の中で育まれる、風土のある所に民族が生じるのだとしたら、方言を消し去っていく標準語を話す風土なき都会(しばしばそれは民族国家の中心である)が、かえって最も民族性を喪失させる場所なのかもしれない」ともいう。

ヤマト民族というときその淵源は結局記紀神話に帰着する。しかしその記紀神話なるものがきわめて政治性の高いものであり、そこではヤマトが出雲を始め、クマソ、エミシなど列島の他民族を支配するための正当性が語られている。しかし『出雲国風土記』では明

らかに記紀神話と違う物語が語られており、その神話を記紀は勝手に作り替えている例証を挙げ(例えばオオナムチは出雲国を譲っていないのに、オオクニヌシの国譲りの話になつていることなど)、明治以降学校教育などを通して「日本人の民族意識は、出雲の神々や出雲神話を、さらに作り変えた建国神話によつて形成された」ことを明らかにする。戦後しばらくは神話が学校教育から消えていたが、一九六〇年代以降再び取り上げられるようになった。しかもその取り上げ方は戦前と全く同じであり、それがいま日本単一民族論(排外主義につながる)の根拠とされるようになっていくことの危険性を指摘する。

しかし近年アテルイの復権やクマソの復権運動、宮古島の池間民族の形成などが起きており、希望はそこにあるという。

結論は「幻想の単一民族論や島国論、大和中心の一元文化論から自らを解き放ち、近代国家形成以降、特に高度経済成長の中で否定され、封じ込まれてきた様々な個性や多様性を取り戻す、日本人自身のアイデンティティ再構築の作業が必要だ。…同質・均質社会を追究してきた規格大量生産型社会の行き詰まりがもたらした閉塞感から、日本を蘇らせるための鍵が、そこにあるのだ。」である。

平山善之

- ① 「民族の創出」 岡本雅享 岩波書店
- ② 「儒学殺人事件」 小川和也 講談社
- ③ 「会社が消えた日」 大西康之 日経BP社

① 出雲出身で、えみし学会の会員でもある著者の主張を要約すれば

“明治政府は天皇を頂点とする国民国家をめざし、記紀神話を拠り所として之に記載ない、或いは反する史実を無視または抹消した。戦後日本は大量生産工業国家をめざし、鑄型に嵌まった国民をつくり上げてきた。地方独自の言葉は方言とされ、標準語を話せないと軽蔑された。こうした大和中心史観による日本列島単一民族論は誤りであり、打破されなければならぬ”ということであろうか。そしてその言を直接紹介すれば、

「郷土は国家の犠牲にしている、重要度の低い従属物ではない。郷土の歴史も国家の歴史の従属物などではない。民族や文化の歴史に優劣などないように、大和の文化・歴史も出雲、エミシ、クマソの文化・歴史の間にも優劣などない。」「多種多様な共同体の総体と

しての日本であってこそ、より健全な愛国心も育めると筆者は信じる。」

えみし学会の一員として全く同感である。

中央と地方は垂直関係でなく、水平関係でなければならぬ。

“地方創生”とはまず、地方が誇りを取り戻し自信と自立心をもつことではなからうか。

② 副題に「堀田正俊と徳川綱吉」とある。

正俊は綱吉のひそかな命により江戸城内で暗殺された、という説に立つて書かれているので出版社がミステリー仕立てにしたらしい。

著者は日本思想史を専門とする中大教授。

正俊、綱吉ふたりとも儒学を好み師について学んでいた。著者はふたりの儒学の中味を、証言や記録を広範に検討し、比較検証した。

正俊の儒学は安中、古河という領国の政治に実践され自身の生活にも活かされていたが、綱吉のそれは、自らをひけらかすためのものであった、とする。正俊は酒井大老に抗して綱吉を擁立したので、綱吉を名君にせんと剛直に諫めることしばしばで、綱吉にすれば、疎ましい大老であったが、自分を將軍にしてくれた恩人であり粗略にできず、鬱憤募り、稲葉正休を使唆し斬らせた、そして実行犯を

その場で切り殺させ、後日自分への非難が及ばぬようにした、というのである。

大老暗殺後、綱吉は重石がなくなり、犬公方と呼ばれる暗君になった。一方、正俊の墓は一旦葬った寛永寺から追い出され、堀田家は山形へ移され、以後冷遇された。正俊の墓は、孫の代に山形から佐倉へ移封された為、その菩提寺、佐倉市内の甚大寺にある。

「幕府最高の意志が背後にあったとしか考えられない大老の最後であった。(譜代藩としては口外できず)口から耳へとひそかにささやかれ伝えられてきた」堀田家の子孫、正久氏も著書に書いている。(堀田家三代記)

③ 日経新聞の記者が三洋電機崩壊のドラマを、読みやすくルポ風に綴ったドキュメンタリー。井植家の経営姿勢、危機に入ってから野中ともよ会長招聘、彼女を素人視する住銀出身の古瀬副社長、銀行の思惑等々、経営陣の動き・人間模様も面白いが、この本の大部分をしめる社員個々のその後の動きも様々で、一層興味深い。

終身雇用・年功序列制、会社は天地の如く永遠と思っていた日本型企業社会は、帰らぬ昔物語になったことを実感させてくれる。

三戸岡 道夫

「アポロは月に行かなかった」

(草川隆著) (栄光出版社)

この本は事実の記録ではなく小説である。一九六九年七月十六日にアポロ十一号は、月着陸を目ざして打ち上げられて成功し、宇宙飛行士は南太平洋に戻ってきた。しかしNASAは国の名誉と威信を高めるためにアポロ計画を成功させたのであるが、それはアメリカが仕組んだ驚愕のトリックだった——というのが本書の内容である。したがって本書はアポロ飛行の事実記録ではなく、あくまで「アポロは月に着かなかった」という小説である。

では、どうして月へ着陸しなかったアポロが月へ着陸できたのか。それは、

(最新の映像技術を駆使した恐るべきトリックである)

として、小説に仕立ててあるのである。

いろいろな事件がニュースとして世の中へ拡っていくのは、テレビ、新聞、雑誌、インターネット、スマホなどと様々であるが、一

番強力なのはテレビであろう。テレビに出たといえば、誰もが本当だと信じてしまう。カメラが写したものは本当だという映像信仰が、人間の中にあるからである。

しかし最近では特殊撮影などの技術が発達し、無いものが有ったり、異物が混入しても本物だと思える、偽の映像が出来るのである。そのような技法をアポロ着陸に使い、テレビで放映すれば、アポロは月に行かなくても、月に行ったという虚像を世の中に作り出すことが出来た——というのが、この小説の荒筋である。

そのためには数名の宇宙飛行士と、設計士、カメラマン等によるアポロチームを作り、そのメンバーが秘密を守っていれば、アポロ月着陸の虚像は成功するのである。

まずは打上げシーン。これは、これまでに宇宙ロケットは何回も打上げられているから、それを参考に適当な模型を作って撮影すればいい。

次はロケットの内部。これも従来のロケットの内部を参考に、スタジオにセットを作り、その中で三、四人の飛行士に演技をさせれば、すぐ出来る。

次はロケットが飛んでいる宇宙空間の風景。これは闇の中に無数の星がちりばめられた、これまでにロケットが飛行した時の映像があるから、それを適当に使ってもいいし、またそれをモデルに模型撮映してもいい。

そして最後は月への着陸。それはスタジオの中に、砂なのか岩なのかわからない物質が巨大に拡っている月の表面の空間を作り、そこへロケットが本当に着陸したように撮映する。これも最近の技術を使えばそれほど難しいことではない。

そしてこれらのシーンをテレビに流してうまく解説し、同時に新聞などのマスコミでも大騒ぎすれば、誰もが本当だと信じ、「アポロの月着陸」は真実となるのである——というのが、この小説なのである。

この小説をどのように読むかは読者の自由であるが、最近の科学技術、映像技術の発達はおそろしいほどである。これからも、アポロ着陸のような虚像が実像として、作られることもあり得るのではあるまいか。いや、すでに現在においても多く作られているのかも、しれないのである。

村上 邦治

①『本居宣長』 田中康二著

中公新書

宣長は日本文学と神道思想の巨人である。

『源氏物語』について、初めて「物のあわれ」説を提唱したし、『万葉集』、『古今集』の研究から、歌学を樹立、自らも多くの和歌を作った。また、上田秋成との論争で分かるように、卓越した国語学・言語学の主でもあった。

思想家としては、『記紀』の研究を深め、とりわけ『古事記』を聖典として、天照大神を中核とする神道論を唱えた。そして日本本来の「大和魂」の見直しと、儒仏渡来以後に蔓延する「漢意」（からごころ）を排斥した。

神道に関する著作は多く、しかも膨大である。『玉くしげ』、『直霊』（『直毘霊』）、『古事記伝』等と、彼の思想は深化しており、宣長神道の全貌把握は難しい。

この本は、宣長という森林を、枝や幹からなる樹木や、木立や林を見事に分解整理し、彼の文学や思想の進展を、時系列で分析する。これまで、葉や小枝に振り回されて、宣長の森に行き着けなかった者にとっては、有難さ

を越えて、感動させてくれる。宣長に挑戦する者にとって、この本は、有力な羅針盤になるものである。

前書のお蔭で、再び名著に向かい合うことができた。相良亨著『本居宣長』（講談社学術文庫）である。

本書は一九七八年刊行され、宣長の「物のあわれ」論と神道論とのつながりを解明したものとして定評があり、三年前学術文庫として復刊された。直ぐに挑戦したものの、数ページでとん挫、お蔵入りとなっていた。

この度、有力な鳥瞰図を得て、相良宣長に挑戦、何とか読み通すことはできた。しかし、「人は死ねば黄泉に行くということが、一方においては神道の安心として捉えつつ、同時にこれが悲しむほかなしと捉えられ、安心と悲しみが一体的重なり、宣長の安心とは悲しむべきことを悲しむことに安心があった。」や「学問をして待つ。そして「其時の神道」にしたがう（せむかたなし）の二重構造的な生活の形は、彼なりの安心に支えられたものであった。」とする相良の主張は、倫理・哲学の素養に欠ける者には、理解できたとはいえない。深遠な宣長の思想と相良を理解するには、まだ遠いことを、思い知らされた本である。

②『新釈古事記伝・袋背負いの心』

阿部國治著 致知出版社

著者は明治三〇年生まれで、東京帝国大学法学部と文学部をいずれも首席で卒業しながら、満蒙開拓者や女子高の教育に携わり、出世欲や金儲けに、関心のない人であった。

本書は昭和一五年に出版され、今年復刊された。『古事記』の入門書として書かれ、原始日本人の叡智と祈りを、分かりやすく説いている。表題は、「大国主命が背負っている袋の中には、この世の中のあらゆる心配事や難しい問題がいっぱい入っており、この袋を背負っておられるところは、本当の親切心、本当の愛のこころである。」とするところからくるものである。『古事記』に潜む、日本の古代人が持っていた魂を悟り、人々に説こうとした本である。

この時期、「我国の有り様を見ると、『古事記』の扱い方が、本道を歩んでいないような気がいたします。」と指摘、政府批判や反戦論とも取れる。宣長の国学や和歌（敷嶋の大和心を人間わば朝日に匂ふ山桜花）が、歪曲され戦争加担化された当時、よくぞ主張できたものである。著者の『古事記』に対する信念は、極めて強かったのであろう。

新井 宏

『日露戦争下の日本・ロシア軍人捕虜の妻の日記』 ソフィア・フォン・タイル著、

小木曾龍、小木曾美代子訳

(新人物往来社)一九九一

前ロシア外交官ウラジーミル・フォン・タイルが日露戦争に参加し、重傷を負い捕虜となつて松山捕虜収容所へ送られた。

その通知を受けた英国人の妻ソフィアは一九〇四年六月ペテルスブルグを出発し、米国を経て七月末に松山に着き、一年半にわたり夫を看護しながら日露戦のさなかの松山について書いた英文日記(一九〇七年版)の翻訳書である。

著者のソフィアは二十年前に、前夫ポールと共に東京のロシア公使館にいたことがある。英国貴族出身なのでプリンセス・ソフィアと呼ばれていた。しかし、野卑で傲慢、残酷な夫と死別してから、外交官ウラジーミルと再婚した。夫は外交顧問・法務官の資格で幕僚大佐として日露戦に参加し、本来の任務を離れて斥候に出ていて捕虜となった。

翻訳者の小木曾夫妻は共に東大出。経歴から見ると、専門家ではなく、この著書を読んで感激して、翻訳を思い立ったようである。

本の概要は、「訳者まえがき」から引用するのがてつとり早い。

一九〇〇年ころの日本は、まだ世界の一流国とはいえず発展途上国であつて、国際舞台で対等の地位を獲得すべく「追いつけ、追いつけ」の時代であつた。この国をあげての近代化政策は、国土が狭い条件もあるうが全国津々浦々に驚くべきテンポで浸透し、実行に移されていた。タイル夫人の目をまず奪つたのは、突如現れた宇品港の威容と隣接する軍需工場の群、およびそこで立ち働いている人々のいきいきとした姿だつた。それに続いての約一年半、彼女の心のカメラが捕らえたさまざまな映像は、いわば西洋的な視点に立った第三者が写した日本の地方都市のアルバムともいふべきもので、その当時の日本の姿を伝える貴重な記録であり興味が深い。……

筆者のタイル夫人は絶えず日本および日本民族の素晴らしさを好意を持って同胞に説得していて、これは日本人としてくすぐったい気持すらするが、不愉快なことではない。……著者が如何なる意図でこの日記をアメリカで出版したか不明であるが、……おそらく日本人に読まれることを意識しないで書かれたものであろう。

旅順港でステッセルが降伏した時、三年間持ちこたえるシャンペンとウオッカはあつたが、クロロホルムと包帯がなかったとか、英国が菓などの支給品を乗せて、大連に行ったが、日本が全て準備して待機していたとか、

トルストイの『復活』の牢獄場面は真実を伝えていないとか、とにかく面白い。

しかし、どこか変なのである。英国公使館にはプリンセス・ソフィアらしい記録がないし、身近な人物として描かれている男爵樋口台湾総督(二十年前の樋口中佐)はどうみても児玉源太郎なのである。捕虜収容所の所長軍医も該当者がいない。

そこで本著の三年前に出版されたグプチンスキー(小田川研二訳)『松山捕虜収容所日記』に目を通してみた。やはりちぐはぐである。念のため、原書のタイトルを見ると日本語で『ハーグ条約のもとで』となつているので、インターネットに「Hague Ordains」と入れてみた。すると出てくるは出てくるは、それらの全てが著者をエリザ・シドモアとしているではないか。

彼女はその当時既に有名なノンフィクション作家であつたが、フィクションとして書いたものなので、初版では著者名を記さなかった。そのため、小木曾夫妻が間違つたらしい。しかし、本書の二〇〇五年版ではエリザ・シドモアと訂正されている。

ちなみにエリザ・シドモアはワシントンのポトマック河畔に桜並木を作することを提案した人物である。

中島 茂

「八月の砲声」 上・下

バーバラ・タックマン著、山室まりや訳

(ちくま学芸文庫 上・下)

この夏は第一次世界大戦勃発後百年目にあつた。上・下巻合わせて九百ページを超えるこの書はピューリッツァー賞受賞作。大戦勃発の一九一四年八月初〜九月初の西部戦線・東部戦線の実態を活写し、その後の戦況にも触れている。

当初の予想をはるかに超えた戦争の長期化と戦死者・負傷者の数は、一度始まったら止められない「戦争の力学」をまざまざと感じさせる。

著者はまたドイツ皇帝カイゼル、フランス軍総司令官ジョッフルをはじめ、主要な登場人物の性格や行動の特徴を生き生きと描き、それが本書に物語り的なおもしろさを添えている。

周知のように、日露戦争中からその後にかけて、ヨーロッパの国際情勢は激変し、露仏同盟(一八九一年)に加えて、英仏協商・英露協商が成立、ドイツ包囲体制が完成した。

こうした国際情勢の中で、ドイツ参謀本部ではシュリーフェンプランが練られていた。

対仏、対露と二正面作戦を余儀なくされるドイツは、まず主力をフランスとの戦いに向けて短期決戦でこれを屈服させた後に、ロシアに主力を向けるという作戦である。

ロシアは面積が広大で人口が多い上に鉄道が少なく、軍の展開が遅れると見込んでいた。

フランスとの短期決戦では、国境線にフランスが要塞を連ねているので、この面からの侵攻は難しく、中立国ベルギーを侵犯、大きく迂回してフランスに侵入し、パリを攻略するという構想であつた。

開戦後ドイツ軍の主力は直ちにベルギーに侵攻したが、予想に反してベルギー軍や民衆が激しく抵抗したためドイツ軍の進撃は遅れ、制裁のために「ルーヴァンの焼打ち」等の蛮行に出て、ドイツは国際世論を完全に敵にまわしてしまった。

一方、東部戦線ではロシア軍の展開が意外に早く、ドイツ軍は「タンネンベルグの戦い」で勝利を得たものの、戦線は膠着し、西部戦線の兵力の一部を廻さざるを得なくなった。開戦一ヶ月で、ドイツ軍の作戦計画は重大な齟齬を来したのである。

九月初め、フランス軍はマルヌ河畔の戦いでドイツ軍の南下を阻止し、シュリーフェン

プランを失敗させたが、勝利を得るには至らず、以後西部戦線は膠着状況に陥った。

冬の訪れとともに、フランスとベルギーの国土を横断して両陣営の塹壕が築かれ、陣地戦・消耗戦となった。それは以後四年も続いた。

戦後の調査によると、全人口中の戦死者数の割合は、フランスでは二八人に一人、ドイツでは三二対一、イギリスでは五七対一、ロシアでは一〇七対一であつたという。兵役年齢に該当する男子中の戦死者の割合は驚くべき高さに達する。まさに「総力戦の悲劇」である。

これほどの犠牲を払いながら、次の大戦を阻止できなかったのはなぜか。その答えのヒントも本書の中から得られるであろう。

ドイツ軍に国土を蹂躪された中立国ベルギー、主戦場となつたフランスなどの激しい憎悪と制裁への執念は、戦後敗戦国ドイツに対する過酷なヴェルサイユ条約を生み、ドイツの窮迫はナチスドイツの抬頭を促す要因となった。まさに歴史の「負の因果」の連鎖である。

内外ともに多端ないま、本書は一読に値するものである。

(友の会)

自由原稿

地磁気年代に関する新事実と

箸墓古墳の情報公開

高橋 正彦

前回(六月)自由原稿で水月湖の年縞地磁気と箸墓古墳方位との関連について述べたが、その後、年縞に関する新事実及び宮内庁の同陵測量データの情報公開等(八月五日付)があり、事実がより明白になったので茲に報告する。

【地磁気研究の現況】

岡山理科大学の畠山唯達氏(助教授)に右視点に関するメール照会のところ、「公開したデータに水月等の湖水堆積のデータはない」「湖水堆積の残留磁気は実際よりも変化量が小さい(なまされる)のではないか」「サンプルは最低2 π 角が必要」……との回答を得た。

水月湖年縞のコアサンプル再掘削(八月)に關し、「単に資料館展示用の再掘削が目的ならば、地磁気サンプルを取らせろ」と福井県に要望したところ、「サンプルコアは方位を記録」「シャフトはステンレス管を使用」との事で、新聞報道では触れられていないが、実は地磁気データの取得が目的である事が判明した。但しこれを誰が分析するかについては、

再三尋ねるも沈黙に終始。富山大学広岡公夫(明石原人?等の旧石器地層の磁気年代を論究)ないし福井大学系列が扱うのか、それ以外の系列なのか、いかなる機器を使うか、一切不明・不明朗。(富山・高知・熊本大の超伝導磁力計Ⅱ一億円弱を使用した場合、サンプルを各2 π 角に取ることなく、連続で微細測定が可能)

【本論の究極目的】

地磁気永年変化の紀元五百年〜紀元〇年部分は、年代不確定であり問題がある。是に対し、水月湖年縞堆積の再構成結果は須恵村窯跡の地磁気変移とシンクロしており、更に、本邦最古級の古墳Ⅱ箸墓からこの磁気年代に關するデータが検証できる。ここから、是等磁気年代には相当の根拠があると思われる。

——是に対し、ほぼ同じ条件の水月湖年縞が本年採取されたが、なかなか結果が公開されず、更には明晰な結果に至らない危惧がある。そこで敢て、水月湖年縞の【地磁気の新データの公開に先立つ二〇一四年の時点で】本論が活字媒体において先唱された事、及び箸墓古墳の平面の基本設計に於いて地磁気が使用されている事を世に問うものである。

なお、年縞の分析に於いてコアが一本で完結せず複数に及び、かつ年代確定を(問題の多

い紀元五〇〇年以前に限定せず)現代部分から始めて、以下順次数メートルに及ぶ場合、年代確定に時間を要する事が推定される。本論はその公開以前に出される事に意味があり、それ以後では存在価値は半減する。

【水月年縞に関する新たな事実】

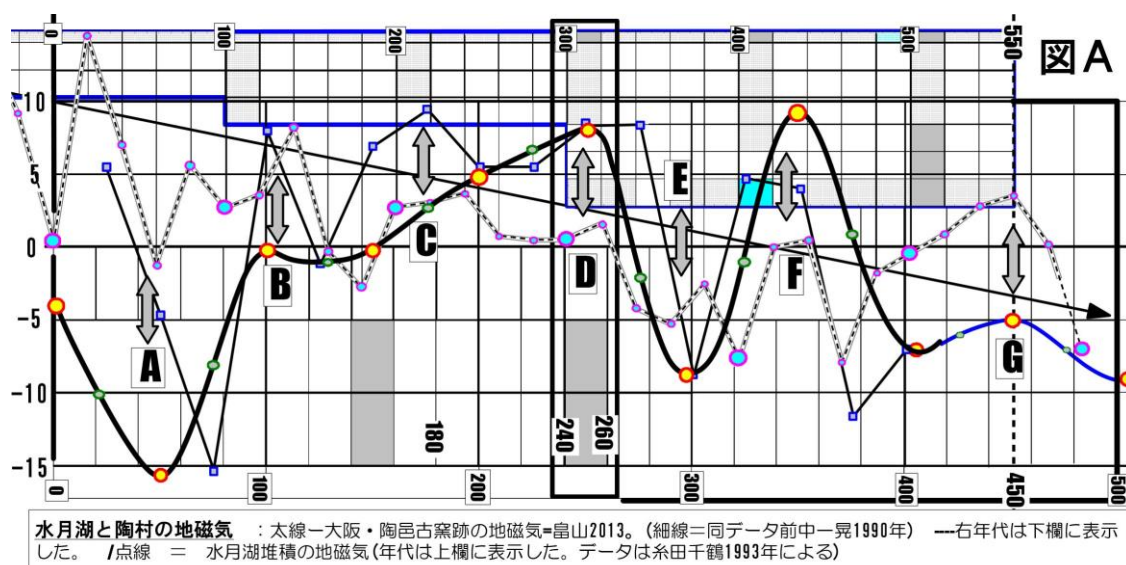
前稿(本通信六月)では「水月磁力変移を十五年引下げ・一〇〇〜四〇〇年間に相關がある」としたが、何分中山喬央氏逝去による急遽起稿につき、自分自身よく状態を把握出来ていなかった。その後、本格的な論文の起草過程でデータ・表の整理・図化作業を通し、問題がより明確になったので、概要を報告する。

……図Aの点線の通り水月湖磁力データ(糸田、一九九三年)の〇〜五五〇年部分を図上欄x座標の通りに引き伸ばし、陶村磁力データ(太線Ⅱ畠山二〇一三、細線Ⅱ前園一九八〇)の〇〜四五〇年に合わせる。以上調整により、水月湖堆積と須恵村の「残留磁気とは、図Aの通り

【四五〇年間で、AとG七点で明確にパターン照合が成り立つ。】

これは糸田堆積データが概略二 π /二〇〇〇年Ⅱ一 π /年…と見積もるのに対し五五〇年以前では実質の堆積率が二〇%程度大きい

(一・二ミリ/年)事を意味する。更に糸田データは二〇二〇年、一〇〇〇年を五分割で概略表示したものと推定する。



【水月年縞に対応する箸墓古墳の方位と宮内庁情報開示による新事実】

本年八月宮内庁より箸墓古墳の測量データの情報公開を得た。恐らく日本で最も早く情報公開を得たものと思われる。是は画期的な出来事であった。(今まで宮内庁陵墓の公共測量は多少あったが、地理院からの照会に宮内庁は全く無回答状態であった。今回、地理院にデータ精度確認の申請がなされ、情報公開の日限が延ばされていた。これ等事実は現地事務所も聞いていない様子であった。)

●但し測量図自体には宮内庁も公開に消極的であり、多少の問題があった。

(1) 通常この縮尺の測量図は平面直角座標を使用するが、方位に明確な特記表明がない。(グリッドを計測すると下端の横幅に若干の狂いがあり、上端に対し1ミ程度下端が広く、地理院標準のUTM座標によるかと疑う。)

(2) Aの元図を画像化し陵輪郭点(約百点)の座標値と共にCADに読み込むと、下図の測点画像と測量データがかなりズレる。(CADの点位置は、現地地物を1ミまで表示する精度を持つが、原図に精密な座標付与が不能)

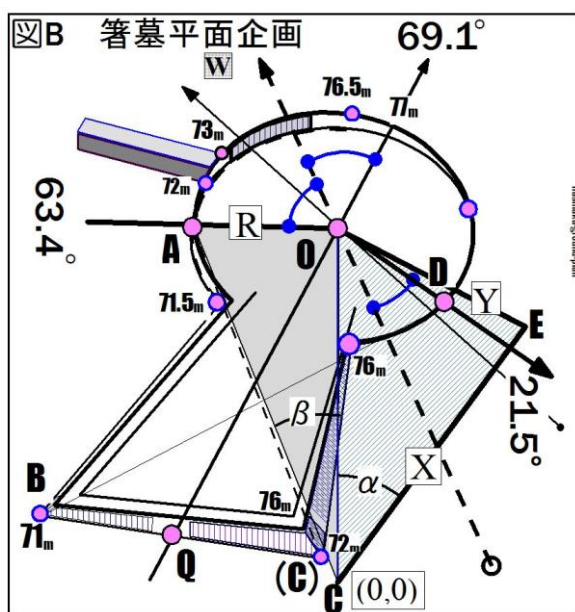
(3) そこで図面を左右2分しCADの下図とし、左右独自に上下左右幅を微調整した。この結果、図面の測点は大体復元できた。

(4) 但し、右方部近辺は誤差が補正し切れず、実位置に二〇センチ前後の誤差が残る。又陵の角点(図BのC点—No.70)に密接するL字状排水溝位置は、明らかに現況と異なり、一八センチ離れて描かれている(図上誤差一八センチ) (公共図・ゼンリン地図等の箸墓部分では、この角点のみが明記特定され、この部分は箸墓の唯一明確な基準点である。然るに、測量図ではこの要点周辺に大きな誤差がある。)

(5) : 座標系は平面直角座標を使用と確認: 陵の境界点数は多く、南北方面に十分距離を取り略真北線状に並ぶ2点がある。例えば、No.8座標(x=2045.611, y=680.129)、No.58(x=2131.524, y=680.389) : 単位はメートル : 実際の座標値にはx=160,000、y=14,000がその上に付くが、簡略して表示(以下同)。

これは2点がx上下八五・九一メートル、y左右が〇・二八メートルの位置関係にあることを示す。そこでCAD図上で点58号上に〇・二八メートルを描きその接線とNo.8を結びその直線を図上計測すると、CAD図面の真北線(座標北)と一致する。これは他のy座標近接点でも同様であり、(当然のことながら)宮内庁測量図

は一般的な平面直角座標で表示されていることが確認できる。1



緯線方向に等間隔經度で引かれたグリッド線は相互に等距離となり、図上でミ単位の誤差は生じない。(補注)測量図に添付される座標北の真北補正值は今城塚・京大構内遺跡で夫々東〇・二二度、〇・一三度に鑑み纏向地方は東〇・一度程度、極微小であり、無視して構わない。

●なお、今回の情報公開により新たな事実が明らかとなった。

(1) 末永「日本の古墳」では不鮮明であった古墳周縁の等高線が、今回測量図では極めて

鮮明であり、更に箸中大池の底地の水準高データーは陵形推測の為に重要な情報を与える。

(2) この結果、箸墓の基盤平面の傾斜は均等ではなく、図 B の BA 間は殆ど水平でここから不自然に急に傾斜が強まる。

(3) この不自然・不均等な傾斜は現在の箸中大池以前に、同様な溜池特有の緩傾斜を導くために意図的に作られたものである。(同一強度の土堤に対し最大限の貯水を引き出すには緩傾斜が有利)

(4) 精密な等高線より円の中心 $\parallel$ O の座標、底辺 B Q C は確定する。更に陵の底辺の先に真の角点 C を仮定すると、C から円 O に至る【接線長 AC の長さ、C の傾度】は計算により求めることができる。

$\vdots$ Cを原点、Oの座標を図Bの $x \cdot y$ 、 α
 $\parallel$ 角 ECO 、 $\beta \parallel$ 角 OCA とすると $\vdots$

$$AG = \sqrt{X^2 + Y^2 + R^2}$$

$$\alpha + \beta = \text{Tan}^{-1}(Y/X) + \text{Tan}^{-1}(R/\sqrt{X^2 + Y^2})$$

の関係式が出来る。

右式において点Cの座標を適切な位置

(5.9)に置き替えた場合に $x \cdot y$ は定点である。円心 O から機械的に求められ、半径 r も既知である。

即ち変数(β, ρ)に対し接線長 AC、及びその傾角は順次、表計算により求めることができる。

この計算過程において、 BQC の先の延長線上 $O \cdot 五$ トル幅の2線を引き、線上の点 C からの接線長、傾角の変移状況から左の結論を得た。

(1) 田中心 (x = 2038.669, y = 571.315)
半径 r = 78.30 m

点C座標(x -2178.123' y -729.198)

とする時、接線長一九五・五六¹、傾角六三・二七度となり、半径の二・五倍長と真北より傾角六〇度に対する誤差が【〇・一%、三・三度】程度であり、接線ACが径rと真北を基準に作図された事が推定できる。

…紙面都合で、計算過程・結果は割愛…

(2) これ等最適点は点 No. 70 より 11 位の地点であるが、是は桜井市の発掘調査に合致する。

(3) この最適点近辺から、より陵に接近すると接線長は半径の二・五倍から一程度縮み、接線 $\parallel$ 半径の二・五倍の仮説の成立が困難となる。

まとめ【箸墓平面企画に及ぶ新事実】

線 0Q が決まり、右 3 線の諸元が決まる。

● AO の傾角六三・四度（真北誤差三・四度）

●軸線ACの傾角六九・一度(図B点線→は座標北基準線であるが、是を東に九・一度戻した時に傾角は六〇度となる。是は方位基準線が東九・一度であることを意味する。)

●接線BDの傾角は二一・五度(偏角 $\parallel$ W八・五度)

…元来皇室関係陵墓に、右の様な接線AC・BDと軸線の3種方位に関する偏角を取ると、これ等は真北・磁北・【その他方位】の三通りに分解される事実がある。真北基準線は殆ど誤差3度以内に収まり、これからこれ等方位には意味があり、更には真北方位に合致しないものは、磁北基準であると判断した。

然し箸墓に関しては、ACの偏角が四度にもなり、「陵の基本線は磁針・真北の2方位からなる」との仮説の大きな蹉跎であった。処が、今回情報公開により、接線ACは真北基準である事が明らかとなった。更には、磁針偏角E九・一度の場合、水月湖残留磁気より大きく東偏する時期を、紀元二六〇年頃と推定できる。且つ陵基本線は磁針に依った事が示される。

但し今後、水月湖の詳細な磁気データが確定した場合、この年代は若干変化する可能性がある。
(以上2014.11.30稿)

余白が生じましたので、「史遊会」創立時の趣意書を紹介します。日付を見ると昭和57年2月(1982年2月)となっていますからまもなく33年になります。

メンバー中、現在も史遊会でご活躍の方は千坂精一さんのみです。柴田弘武さんは第17回の例会(1983年12月)から参加されています。

〈史遊会〉発足のご挨拶

このたび、私も歴史好きが集まりまして「史遊会」というグループを結成致しました。いずれも四十五才以上、定職をもった者ばかりですが、貴重な余暇をもつばら歴史の勉強にうち込んでいる仲間たちです。もちろん、とり上げ方も勉強テーマも十人十色ですが、歴史という共通の地盤の上で、大いにうちとけて語りあおうというわけです。

いうまでもなく学者の集まりではありません。しかし「こういう考え方もできるのではないか」という、いわば作家としての自由な発想を楽しみながら、より歴史に対する愛情と理解を深められれば幸甚と思っております。

毎月一回の例会でどれほどの成果があるかは疑問ですが私どもとしては、あえて熟年グループのひとつのパターンになり得ればと念願しております。

私どもの意向をお汲みとりの上、何卒皆様のご指導とご支援を切にお願い申し上げます。

昭和五十七年二月

以上

発起人(五十音順)

◎印は幹事です

氏名	勤務先	代表作品	出版社
◎伊佐九三四郎	神田女学園	伊豆七島歴史散歩他	創元社
加藤誠	光文社	古道巡礼他	千人社
上村健二	防衛庁	天狗党始末記他	善本社
◎今野信雄	電通	史蹟をあるく他	青蛙房
千坂精一	サトー・セン	上杉騒動秘話他	ダイヤモンド社
難波淳郎	画家	関東古寺巡礼他	すばる書房
◎蜂矢敬啓	大蔵省医師	鎌倉街道他	有峰書店
広瀬守	建築設計士(古建築研究)		

事務局 〒162 新宿区早稲田南町20

TEL 二〇三ー五五四三

菅原麟太郎

自由原稿

今年を振りかえって

― 現状と課題 ―

小田 紘一郎

一、はやいもので今年もあと一ヶ月程、あっという間に月日は過ぎてゆく。そして、日々退屈を感じないことは有難い。いろいろやることがあるからである。

本格的に勉強し始めてから、今年で源氏物語は十年余、ワグナーも四年位になる。昨年の今頃と比べてみて新しい発見とか何か進歩があったであろうか。

今年も両者について朝日カルチャーセンター(新宿、横浜、藤沢)やNHK文化センター(町田)で月二、三回集中的に聴講した。

二、源氏物語は、折ごとに原文に接し、その補完として今年は林望先生の「謹訳源氏物語」(全十冊)を読んだ。なかなかのこなれた名訳で、原文でどうしてもわからないところをよりよく理解させてくれる。和歌の解釈も良い。他の訳者(谷崎、与謝野、円地、瀬戸内)との比較もなかなか面白い。

又、氏の「私抄」は、一三の視点から解説してくれてあり面白いが、すべての見解に同意

できるものではない。先生、そうではないのではと思うところもある。

そして何よりも今年は、同人雑誌「まんじ」(季刊)に「つれづれ源氏物語」として連載を開始し、既に四回程執筆した。分量も気にせず、素直に書こうと努めているが、なかなか勉強になり、今後十回程書き、一冊の本にしたいと思っている。第一回では問題意識と概観を記したが、これらに沿って以降整理していく予定であって、どんなものに最終的にはなるのか楽しみながらやっていきたい。まだ、二、三年先のことである。

なかなか上手に書けないのは、まだまだ物語の内容を十分理解していない為であるが、良いものを書こうと意識すると筆が進まないのが気軽にやるしかないと思っている。その過程で、過去に読んだ書物等を再びひもといっている。

三、ワグナーは、講義で二十回ばかり「ニibelングの指環」を聴いて勉強になった。美しいメロディばかりに心をとられるのではなく、深い哲学、思想について思いをめぐらすことが大事である。歌は独語であるが、訳を見ながら意味をよく考えることが必要であり、源氏物語同様くりかえしくりかえし聴き、読むことに心懸けるべきであると思っており、

来年の課題であり、又、ワグナーの作品は、「さまよえるオランダ人」から「パルジファル」まで七つばかりあるが、それをその主題は何であり、どう関連しているか、どう発展していったか整理を来年はしてみたい。そしてワグナーの人生を追ってみるのも面白だろう。

その人の人生が作品にどのように投影されているかという点である。

CDもいろいろ取りそろえているが、巨匠ハンス・クナッパブッシュの重々しい音に魅せられている。バルバファルはなかなか難しく今年もその深いところはよくわからなかった。

四、これまでも会報の記事にたびたび書いたが、源氏物語とワグナーの比較のようなものを来年は整理してみたい。同じ点、違った点を考え整理する中で、それぞれの作品の意味と限界のようなものもわかるのではないかなかなか面白いと思っている。しかし難しい問題でもある。

話は前後するが、来年は現在の日本の作家達、例えば志賀、川端、谷崎、渡辺等々の人の作品にも視野を拡張、源氏物語との関連等を楽しみたいと思っている。

五、今年収穫だったのは、これまで史遊会通信等を書いてきた雑文、拙文を一冊の本にまとめたことである。『木もれび』——退職後を楽しむ——(p 133)として四十三編を載せてあるが、手元にはまだまだ多くの未稿があるし、また新しい話題も出てようから六十編位集まったらその冊として秋頃には出したいと意欲を燃やしている。あくまで、自分自身の為である。

専門にしてきた農業、農政問題、主として国際的問題という視点で原稿を既に印刷所に提出してあり、二月頃には発刊したい。なお、来年度の史遊会通信においたは、「もののあわれ」〔後期ロマン派の作品〕を記事に、講演については「ベートーヴェンの音楽」あたりをやろうと、そろそろ準備を進めていきたい。これまで。の断片的な知識を一回整理することとは勉強になる。又、老年の時間を有意義に過ごさせてくれる。

源氏物語、ワグナーの諸作品等いずれも巨大な山であり、とぼとぼと登っている感じがするが、今何合目あたりをのぼっているのであらうか。登るにつれて視界が開け、頂上に立てれば大パノラマが楽しめるであらう。それは、いつの日になるだろうか。

(26. 11. 25)

幹事便り

毎月一日は、日比谷図書文化館が、零時きっかりに三ヶ月先のセミナールーム申し込みをネットです。今月もパソコンの前で待ち構え、零時一秒に画面をみると、何と三月二十五日は全て予約済みとなっているではありませんか。

(三月が混むとは予想していましたが、この速さは尋常でなく、千代田区が予め確保しているとは思えません。)

二十四日か二十六日の十八時にずらすか、または二十五日よそでやるか、幾つかの選択肢がありますので、十日の忘年会の際、皆さんに決定して頂きたいと思います。

(平山記)

////////////////////

(2頁からの続き)

漆原直子

③『常陸国風土記と神仙思想』

志田諄一 著

和銅六(七一三年)、元明天皇より風土記撰進の命が下されて、『常陸国風土記』はその約

六年後の養老二年に成立したとされる。四六駢儷体の漢文体で記述され、当時でもかなり高度な文学的技術が用いられているという。編纂者は諸説があり、藤原宇合が有力候補とされているが、この六年間に常陸守を務めたのは、安倍朝臣秋麻呂と石川朝臣難波麻呂の2人で、藤原宇合はその後の養老三年の赴任なので、時期が若干ずれるとされる。

この『常陸国風土記』の内容であるが、その土地の風物や生業、地名の云われ等、“古老相伝旧聞事”を著している。が、著者は、これらの事柄は、神仙思想、道教思想がベースにあるとしている。例をあげれば、久慈郡密筑の里(現在の日立市水木町)の条に“石決明(あわび)”が多いという記述があるが、これは、道教思想に基づいた『神農本草経集中』に記述されているものである。その他、香島郡沼尾池の“蓮根”や軽野の里の“伏苓(まつほど)”等も仙薬として、同書に記述されているという。

こうした事柄から、ヤマト朝廷による東征の目的は、仏教の広がりとともに、道教思想に基づいた不老不死の仙薬を求めていたことも一つにあったのではないか。(了)